

〈研究論文〉

稲荷山宿『蔵し館』と 松林源之助の『北海紀行』について

金 沢 幾 子
(一橋大学附属図書館)

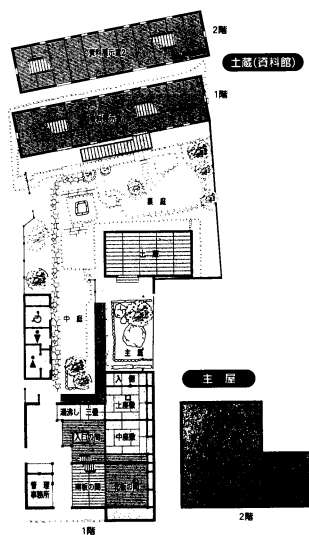
1 はじめに

先の『経済資料研究』No.29 (1999年3月)において、拙稿「明治期信州宿場町商人兄弟の経済学」の中でふれた松林家の旧宅は、更埴市によって修復・再生され、稲荷山宿『蔵し館』として、2000年4月29日に開館しました。『信濃毎日新聞』では開館に先立ち、2000年4月22日の夕刊に、母屋の外観と資料館（展示館）の内部写真を掲げて報道しています。私は6月2日に現地を訪れ、松林芳郎（松林源之助直系の孫）夫妻に案内して頂きましたので、その折りの印象や芳郎氏から頂戴した『松源物語（御先祖の物語）』、史・資料・書簡などをもとに、松林哲五郎（後に源之助 1858-1923: 安政5-大正12）の『北海紀行』について紹介・報告することにします。

2 稲荷山宿『蔵し館』について

松林家では、松林源之助の先々代が広域取引にはげみ、明治維新前後の激動期には、源九郎が「商売に国境なし」をモットーとして、稲荷山から横浜にでかけて外国人相手に生糸や蚕卵紙の輸出貿易に従事しました。英字の商標印「カネヤマ松源製糸」を作ったことは前稿で紹介しましたが、その商人魂は『稲荷山四百年の歩み』において「稲荷山魂」の手本として挙げられ、『蔵し館』のパンフレットにも取り

上げられています。進取の気性に富む源九郎は、明治初期頃に自宅の襖で仕切られた和室を3つの個室に改造し白い把手のドアをつけたそうですが、更埴市は江戸期の弘化年間にさかのぼって修復・再生しましたので、和洋折衷様式は見ることはできませんでした。修復前と修復後の平面図を並べて展示したら、この建物の歴史と「稲荷山魂」の片鱗とが、より伝わるように思いました。



稲荷山宿『蔵し館』平面図

松林家の敷地は250坪。主屋は1847（弘化4）年の善光寺大地震後にいち早く取り入れた耐火建築の白土壁造りで、くぐり戸付きの大戸を経て土間が続き、右手がオタナ（店）になっています。土間からは太い梁が見えるように天井をはがし、この家のしっかりした骨組がわかる仕組みに工夫されました。座敷は平面図にあるように5室、板の間が4室。トイレに改修された部分には台所があったそうです。中央部にある土蔵（内部未公開）は、千曲川の氾濫による被害を防ぐために約1mほど土台を高くしてありました。奥の方西側の二階建ての土蔵倉庫は、二階吹き抜けに大きな滑車に取り付け

られていて、商品の出し入れに使われたそうです。

更埴市は、この土蔵倉庫を「くらしの資料館」として、かつての稲荷山の生業や生活の様子を伝えるために、市民に呼びかけて展示物を蒐集しています。約150年前の江戸末期から残る土壁の「蔵」と、稲荷山の明治以降の「くらし」とをかけて『蔵し館』とネーミングしたセンスは、なかなかのものと思います。展示物は、江戸時代に北国西街道（西京街道・善光寺道）の宿場町として、明治期には繭や生糸の集散地として繁栄したこの地区の地図や、商い店の看板（薬屋のものが多く）に見どころがありました。また、日用品など普段は気にもとめないものにも見近な歴史が実感され、興味がそそられました。

松林家は、しばしば寄り合いや宴会、時には経済・商法の研究の場として、また、今でいうコミュニティホールや、稲荷山商人のサロンとして使われたといえます。「経



松林兄弟写真（明治9年秋）

済博士」と評判であった源九郎や、1886（明治19）年に隠居したその兄にかわって家督をついだ弟源之助の活躍や、勉強振り、この地の商人たちの気風が伝わってくるようです。

3 『松源蔵書』 などについて

北信の地において、当時の最新の経済書や翻訳書を入手した松林兄弟の勉学の跡をしめす『松源蔵書』は、敷地の中央部にある土蔵（内部未公開）2階の木製文庫箱に保存されていました。また、源之助が特に大事と思ったであろう彼理（ペーリー）著『理財原論』（1880）、ボリュー著『国債論』（1882）などは背の部分に革を使用し、書名のほかに「松源蔵書」の金文字を入れて製本してありました*¹。

先にふれたように、この土蔵の床下はかなり高く造られ、かつ質屋をも経営（1976年まで営業）した松林家が質草として預かった品物をこの土蔵で保管するために、火災の予防として電線を引かなかったことや、防虫に注意したことなどから、とてもよい保存状態でした。

そのほか、松林家で文芸本*²と称する和装本類のなかの生花の教授用本に、源之助の妻となる娘の花嫁道具の一つとして父親が購入求めたとの識が墨で記されていました。地主の父親が他家へ嫁ぐ娘のために示した愛情と、そうした書籍を持たせた見識の高さに驚きまし

た。これはほんの一端にすぎないのですが、当時のこの地方の文化を示すものと思われます。この花嫁は本城村（現在では稲荷山から車で1時間ほどの距離）から御駕籠に乗って来そうですが、その御駕籠はかつて兄の源九郎へ嫁ぐ花嫁が乗って来たもので、布地などは相当痛んでいるものの、いまでも保存されているとのことでした。

4 掛け軸など古文書について

前稿で写真2枚を掲載して紹介した源之助が作成した「ダンニング、マクレオット氏の銀行の原理の実践を参看すべし」（1895:明治28年10月）のグラフ掛け軸は2階奥の奥にしまわれていたようですが、その他の古文書類はこの土蔵の入り口近くにいつでも取り出せる荷装で保管されています。おそらく火事に備えてのことでしょうが、先人の知恵に学ぶものがあります。地域と時代と人物の個性が反映されている古文書が、今後とも当地でかつ昔のままの保管状態を損なわずに維持（原地保存、原秩序保存）されてほしいと思います。

更埴市では稲荷山を「蔵の町」として観光に力を入れています、稲荷山も昔から住み続けている住民は少なくなり、かつての中心部もドーナツ化現象でほとんど空き家、空き蔵になっているそうです。それらの蔵にも古文書類が残されているかもしれません。将来こうした民間の古文書・古記録が当時の公文書と対比されたり、公文書を補完する史料として検討されたら、この地の歴史の実像の一端に迫ることになるでしょう。

博物館・図書館・史料館の機能をそなえた長野県立歴史館（1994.11設立）も更埴市にありますので、民間史料が埋没したり散逸したりせずに伝承されるよう、県や市の連携のとれた史料館活動と行政の手腕に期待するところ大なるものがあります。

5 商標のエンゼルについて

稲荷山は江戸後期に広域取引が盛んで、松林家でも松代真田藩の御用商人として、絹、蚕種、杏の種（薬用）、茶などを取引しました。明治10年代頃の作かと思われる松林家の製茶の商標は、2人のエンゼルが看板を抱えている図柄で、ふっくらした頬や顔だちはどうみても和製エンゼルです。芳郎氏の調査では、「文明開化のシンボル」として、『東京日々新聞』（1872:明治5.3.29創刊、『毎日新聞』の前身）をモデルに立石清重が設計した松本市の開智学校（1876:明治9設立、現在は教育博物館）のエンゼルにヒントを得たものではないか、ということでした。

エンゼルの図柄では森永のキャラメルが有名ですが、このデザインも1905（明治38）年に採用されて以来いろいろ変遷しています。錦絵新聞研究家土屋礼子氏（大阪市立大学助教授）の情報によれば、我が国にエンゼルの図柄が取り入れられたのは1822（文政5）年刊の『蘭和辞典』に始まるらしいということです。



商標エンゼル図

6 小林迎祥について

更埴市には、おばすて（姨捨伝説や棚田の「田毎の月」で有名）の名所があり、古刹長楽寺には松尾芭蕉はじめ多くの文人が訪づれて句や歌を詠んでいます。境内に点在する句・歌碑のなかに、稲荷山の地に請われて私塾を開いた福山の人小林迎祥の「何處までも冴え行く月の鏡かな」の碑文を見つけました。おばすてから稲荷山へ向かう道筋

に、塾として一時借用していた関家とその後に移った迎祥塾の跡地を
教えていただきましたが、『稻荷山四百年の歴史』や『更埴市史』第
2巻（近世編）*³に掲載されている以上の情報は、地元でもつかめ
ていないようでした。

7 北海道往路の蒸気船「芳野丸」について



松林哲五郎乗船前写真
（明治13年3月）

哲五郎（源之助の幼名）が従者
をつれて稻荷山から上田、熊谷を
経由し、横浜から北海道へむけて
出航したのは1880（明治13）年3
月、弱冠21歳の時でした。乗船し
て間もなく、「芳野丸」は暴風雨
におそわれて何日間も漂流し、千
葉の館山へ漂着しました。『函館
新聞』の明治13年4月8日および
11日号には、「芳野丸」遭難始末
の記事が掲載されています。

芳郎氏は船の科学館に問い合わ
せ、「芳野丸」が1862（文久2）
年に加賀藩購入の蒸気船（75馬
力、250トン、グラスゴーで1861
年建造、1901年解体）であるとの情報を得ましたが、船長の名前は未
だわからないそうです。九死に一生を得た哲五郎は、このように小さ
な老朽船には乗るべからずと『北海紀行』に記していますが、この
「芳野丸」の寿命は、哲五郎が帰路に乗船した大型蒸気船「九重丸」
（190馬力、1130トン、三菱汽船が1875年建造、1882年沈没）よりも長
く、嵐の中を難破せずに運航した船長の手腕が優れていたことがわか
ります。後に源之助は「抜群なる航海家」という新体詩を作り、「芳
野丸」の船長の技術と気丈さを讃えています。

8 松林源之助の『北海紀行』について

前稿では、『北海紀行』の旅程や旅の目的などの要約を紹介しましたが、その後、芳郎氏は『北海紀行』全5冊（経費之部、路程之部、箱館之部、札幌之部、小樽之部）オリジナルをCD化し、その現代訳を試みました。矢立で書かれた毛筆書体の判読は容易ではなく、専門家によって正確にしたいと願っておられます。

経費之部（第一冊）と路程之部（第二冊）は、部分的に既に取り上げていますので、この現代訳（仮）にそって箱館之部（第三冊）、札幌之部（第四冊）、小樽之部（第五冊）の内容を紹介しますと以下のようです。なお、原文にはこのような項目立てはありません。

「箱館之部」（明治13.3.16～4.9）

上州路（3.16～18、3.17: 上州新町紡績所）→東京（3.18～21）→横浜（3.21～26 横浜、北海道経済、北海道地理、国際経済、決意）→船中（3.26～4.8 嵐、北海道経済、北海道地理、北海道物価昂貴之考、元井氏からの北海道漁業、親方、開拓人夫募集、農業開発、船賃、アイノ人）→函館（4.8～9 函館市街、北海道経済、北海道地理）

「札幌之部」（同4.8～4.17）

函館から七重へ（4.8～11 函館から七重、病苦、北海道農業、4.9: 七重勧業試験場、開拓政策、北海道経済）→七重から森・室蘭（4.12～13 アイノ人、森、室蘭）→鷲別・幌別・白老の海岸（4.14～15 アイノ人（幌別および 白老にて））→苫小牧・植苗（4.15～16）→千歳・嶋松（4.16～17、4.16: 開拓者中山久蔵氏）

「小樽之部」（同 4.17 ～5.23）

札幌（4.17～21 札幌近郊、北海道地理、札幌市街、開拓政策、器械所、繊維工場、農業開拓試験場、鮭孵卵所）→石狩海岸（4.21～22）→銭函（4.22～23）→小樽（4.23～25）→塩谷・蘭嶋・余市・然別（4.25）→然別から岩内へ（4.26）→雷電越（4.26～27）→黒松から長方部へ（4.28）→黒岩から落部へ（4.29～4.30）→落部から函館へ（4.30～5.7 落部から函館、道人氣質、北海道之意見（七重にて）、函

館近郊、北海道漁業（函館にて）、北海道経済（同）、幌泉・浦河・根室、北海航路、信州物産の評価、旅支度の反省）→帰国船にて（5.7～10 北海道経済、旅の乗物）→東京からの帰途（5.11～23）、あとがき

読んでいて気がついたことの一つに、哲五郎の情報収集と考察の態度があげられます。乗船前の横浜でも『北海道開拓雑誌』（1880:明治13.1.31 津田仙創刊）を購入して北海道経済について考察し、芳野丸の船中でも乗りあわせた北海道平民の元井徳二郎氏から聞込んだ事柄を子細にメモしています。例えば、税（漁税は旧幕府と同じ、高税は煙草・酒のみ）、相場（海煎鼠、干鰯、昆布、鮭、数の子、鯡、鱈など）、金利、世話口銭、工賃、小売値、運賃、生計費など。現代ならインターネットで居ながらにして現地情報を入手できますが、明治10年代において事前情報の収集をおさおさ怠らなかった哲五郎の聡明さが目につきます。

その考察も経済の理に照らして判断しています。ほんの一部にすぎませんが、現代訳（仮）に金沢の解釈も多少まじえ、哲五郎の経済的考察の特色のでている箇所を以下に取り上げてみました。

物価高騰については、「資本が少なく利子が高いのも原因であると考える」、かつ「漁業の利益が非常に多い為に漁者は皆金満家となる筈なのに、饒利は怠惰を生み、怠惰は奢侈に移り、奢侈は物価を高騰させる。これが正に物価高騰の原因である。更に新しい土地の為に製造業が無く、危険が多く、需要も少なく、それらも物価高騰の原因とは思わうが、北海道の物価が高いのは基本的には前条で述べた原因に基づいていると考える。」（函館への船上で）

「北海道は漁業の利益が多いゆえ農業は何分にも不振である。官の保護で農業に従事するよりも利が多いからである。官の保護が手厚くとも農夫に特別の利益をもたらしている訳ではない。農夫は漁者の利益の後に従っているに過ぎない。私は開墾が容易でない事を痛切に感ずる。しかし、経済上から論じると、漁夫は決して永く利益を独占するものではない。物価は永く高いものではない。漁夫と農夫が並ぶ時

期は必ず来る。ただ、その時期が遠い先になってしまうというのが私の観察である。」(同上)

「北海道は風が烈しく寒さも厳しい。全道の概ねが山嶺で懸命に耕地を起こしても僅かに山間の狭地に過ぎない。此の地に適した植物も多いというが、風寒のため多量の労力を要し、農業の期間も短く、我が信州に比べて収穫が少ないのは実に嘆かわしい。租税が免除され地価が安いといっても償うに足らない。

経済論に「上田三進して中田二進し下田一進す」*⁴という通り、上田の地価が増進して利潤が少なくなるか、或いは上田の収穫が人口を養うに足らないようにならなければ難しいと思われる。北海道は漁業に於いて上田のような地位を占めているので、漁者が多数に過ぎるか、或いは漁場の地価が増進して利潤が少なくなれば、恐らく耕地が盛んになることはないであろう。」(七重にて)

「北海道は到底開けないのか。否決してそんな事はない。ただ山風雪寒の為に進路が妨げられているが、欧米各国にもこのような土地で既に開けている国もあるので、北海道が開けないという理由はない。しかし、緩急順序というものがあり、国によって各々異なる。北海道の地が農耕は成功しないという訳ではないが、農耕だけで此の地を維持できる造化の構造ではない。先ず此の地に適するのは漁業である。第一に魚産を米麦と交易し、漁業が成功してから鉱物に着手すべきである。それが成功し、人口が増えたら農業に就くのが順序である。今直ちに農業だけで此の地を開こうとするは実に難しい。」(同上)

「北海道の地は山岳のみで平地は実に少なく[一部の] *⁵土地だけが日本固有の農業で開墾すべき地である。その他は牧場とか、採鉱とか、或いは木を伐って木酸を製造するか、葡萄を植えて酒を醸造するか、その他西洋の各種の技術を採用し器械を用いて日本人が未だ想像もできない方法で開墾するのでなければ決して成功はしない。それ故に道庁は無闇に洋風の建物を建築し、器械を集め、海外の植物培養と種子の製造をのみ試験することに従事している。従って人民がこれを模倣して各種の技術を採っても習熟していないので損得もわからず、培養製造法も詳しくなく、資金も要する事でもあり、開墾は速やかに進まない。」*⁶ (札幌にて)

北海道の開拓には有名無名の先駆者たちの筆舌に尽くしがたい労苦がありましたが、寒冷地稲作の父として顕彰されている札幌郡島松の中山久蔵の功績がその一つに挙げられます。中山久蔵は寒さに強い赤毛種の品種の種もみを改良し石狩、空地、上川などの農民に無償で与えて農業の開拓に貢献しました*⁷。また、久蔵は駅通（駅舎と人馬等を備えた宿泊、人馬継立、物資の通送施設）*⁸にも関わっています。1877(明治10)年4月、札幌農学校の任務を終えて帰国するクラーク博士は札幌から南六里の島松駅に達すると、駅通中山久蔵家に入って休憩をとり、いよいよ別れの時にヒラリと馬の背に跨り、「Boys, be ambitious like this old man」と叫んで、雪泥を蹴って疎林のかなたへかけ去った*⁹と伝えられています。この3年後に哲五郎は旅宿を兼ねた中山家に宿泊し、久蔵の経歴や田畑の様子などを記録したほか「其の米を食べ、かつ米粒一握りを貰い、国元へ持ち帰ろうと荷物の中に入れた。早稲種で上等ではないが、食べてみるとそれ程下等でなかった。」と“中山の赤毛”に関心をよせ、貰い受けています。

アイヌについては、その風俗・風習を絵で補いながら観察・記録していますが、アイヌの人たちに宿を親切にもてなされ、アイヌの子供を学校にだして勉強を教えてもらうことを勧めて喜ばれています。

信州稲荷山へ無事に戻った哲五郎は家督を継いで源之助と改名し、家業の再建に励みます。源之助が作成した帳簿類は、経費帳（甲乙丙の3部）、損失帳、反別地価原帳、家賃帳、地料帳、株式台帳、有価証券売買帳、信用貸帳、抵当貸、収益帳、収入帳、出入帳、支出帳、質物台帳、短期帳、統計表など30種類を越えます。なかでも統計表は明治30年代の質屋の経営分析表を含んでいて、源之助が多角的な経営システムを考案し、数値の分析を試みて緻密に経営にあたっていた様子を窺い知ることができます。

その生活は、堅実で華美にはしることなく、合理的で、家族団欒を大切にしている考え方に基いていたようです。源之助が20代に書いた『北海紀行』も、30代にまとめたマクレオット氏の銀行原理の実践の

掛け軸も、40代頃からの統計表の類も、経済書を通して学んだものと実際の観察や経営実践とを結びつけた地に足のついた考察であって、その態度は若い時から一貫しているとの印象を受けました。

単なる物見遊山ではなく、国際的な視野をもち、当時の産物や物価・流通などのデータを記録し、沈着冷静な観察と考察を怠らなかった若き一商人の目を通して書かれた紀行文は、より正確に解読されて、明治前期の経済史料として是非刊行の運びになってほしいと願うものです。

注

*¹ 松林家で製本され（「松源蔵書」の金文字入り）、家紋の「結び雁金」を蔵書印として押された図書は、先にあげた2点のほか、ペイジホット著『英国金融事情』（1883）、ケアンネス著『経済要義』（1884）、スペンサー著『社会学之原理』（1884）、アダム・スミス著『富国論』（1884～1888）、マクレオット著『銀行論』（1884～1890）があります。

*² 例えば、まきの（源之助の妻）が生家から持参した書籍に源之助がその旨を記した小原燕子著『明治女用文』（明治12年9月刊）は「松林子供蔵書」とも墨書されています。その他文芸本と称されるものには、『源氏物語』『太平記』『詞の玉緒』（本居宣長のほか、『幼学須知文家必要』、『古今銘盡大全』（元禄15）、『博覧古言』（天保5）、『廣益正字通』（明治8）、『家相大全』などの実用書もあるそうです。

*³ 『更埴市史』第2巻近世編第10章（近藤明執筆）「言流舎と小林迎笑」では、俳人としての業績が主に書かれています。

*⁴ 「上田三進シテ中田二進シ下田一進ス」は誰の言葉を引用したかは判りませんが、『小樽之部』でも「漁業正ニ開ケテ又人民ノ容ルベキナキニ至リ又其利モ之ガ為ニ自ラ薄ク且ツ漁場ニ於テ夥シク之ガ為ニ農産ノ需用ヲ生ジ漁業ト農業ト其利相半スルニ至ッテ始メテ農業ノ進歩スルニ至ルベシ」と述べています。

*⁵ 原文は地図に点線で囲みをつけています。

*⁶ 哲五郎の七重勸業試験場見学等に基づく文と思われます。その背景となる当時の状況を『ななえの歴史と伝説』（七飯町教育委員会発行 1993 p.42-51）によって概略すると、以下のようです。

七重官園は、北海道の農業を開発するための試験を行うことと、西洋の農業のやり

方を研究するために、1870(明治3)年七重開墾場として発足。バターや粉乳の製造、製紙、ヨーロッパ種などの穀物や野菜の栽培、りんご、葡萄などの果樹栽培、園芸、家畜飼育、養蚕、人工孵化などを試みました。78(同11)年七重勸業試験場と改称し、家畜の改良・貸付けや洋式の農具・器械を希望者に販売、79(同12)年にはワイン、ブランデー、甜菜糖、ジャム、ハムなど製造販売、80(同13)年にはとうもろこし、ようちゅう、グーズベリー酒などを試製。

*⁷ 『きたひろしま歴史物語』(北広島市教育委員会・生涯学習部社会教育課発行 1996) p.10-11

*⁸ 『きたひろしま歴史散歩 =郷土の歴史ガイド=』改訂版(北広島市教育委員会編集・発行 1996) p.24-25, 54 によれば、島松駅通所の設置は1873(明治6)年12月で初代取締人は山田文右衛門、中山久蔵が4代目島松駅通取締を申し付けられたのは1884(明治17)年8月であるが、1880(明治13)年頃には久蔵宅を島松駅通継替所として使用していた、とあります。

なお、島松駅通所は国指定史跡とされ、北広島市教育委員会が作成したパンフレット『旧島松駅通所 Shimamatsu Relay Station』でも「正式に駅通所となる以前にも駅通の機能の一部を担っていたことが推定される。」と記述されています。

*⁹ 『きたひろしま歴史散歩』p.28、『クラーク先生とその弟子たち』(大島正健著、大島正満・智夫補訂 新地書房 1991) p.123. 大島氏の文には「駅通中山久蔵の家に入って」とありますが、クラーク一行が訪れる直前の1877(明治10)年3月に駅通取扱人に任命されたのは鶴谷新次郎で、中山久蔵はその請人です。このことから、早い時分から中山が実際の経営に携わっていたことがわかります。